

2023年度
第2号

医学教育センターニュース



編集・発行 愛知医科大学医学教育センター ～Jan. 2024～

◆白衣式



2023年10月14日の土曜日、秋晴れの中、たちばなホールで、医学部4年生を対象とした白衣授与式を実施しました。白衣授与式は、医学部生が臨床実習に進むに当たり、白衣を授与して、医師を目指す者としての自覚を促す式典です。CBTや臨床実習前OSCE（Objective Structured Clinical Examination：客観的臨床能力試験）が、今年度から公的化試験となり、合否判定基準など全国統一基準で実施されました。この試験に合格した学生たちがこの白衣式に臨んでいます。開会にあたり、笠井医学部長からClinical Clerkship Studentとして72週の臨床実習について、多くの経験を積んで今後の医師の道を歩む糧にしてほしいと激励の言葉をいただきました。その後、4年生全員にClinical Clerkship Student証書が送られ、Clinical Clerkship Studentのワッペンを鈴木教授（放射線科）、春日井教授（消化管内科）、神谷教授（糖尿病内科）、早稲田教授（医学教育センター）の4名から白衣の左肩の袖に貼付していただきました。

そのあと、祖父江学長、道勇病院長、井上看護部長、愛知医科大学同窓会から福澤先生より、臨床実習に向かう際の心構えをお話いただきました。また愛知医科大学同窓会からは、長袖白衣の目録を贈呈いただきました。そして、本学研修医の水落麻由先生からも、愛知医科大学の先輩として温かい言葉をいただきました。

研修医はClinical Clerkship Studentから一番身近で頼りになる存在です。最後に、4年生全員が協力して作成した宣誓文を学生代表の柴田真友子さんが読み上げました。宣誓文は毎年、学生たちが話し合っ



て決め、学生自身がどのような心構えで臨床に臨むのか、その決意が表れています。今年も素晴らしい宣誓文が読み上げられました。4年生全員がこの白衣式で抱いた理想の医師像を目指して、臨床実習を充実したものにしてほしいと思います。

本年度の宣誓文は以下の通りです。

私たちは Clinical Clerkship Student として医療現場に参加するにあたり、以下のことを誓います。

- 一、医療者であることを自覚し、自身の言動に責任感を持ち積極的かつ真摯な態度で臨みます。
- 一、生涯学習を理念に、日々進歩する医療と向き合います。
- 一、利他主義の精神を大切に、円滑なチーム医療を目指します。
- 一、指導医や他職種を尊重し、協調性を持って安全な医療を提供します。
- 一、将来社会に貢献できる医師となるべく、誠実に取り組み自己研鑽を重ねます。
- 一、すべての人に感謝し、敬意を持って行動します。

医学教育センター 講師 河合聖子

◆インターンシップの受け入れ

2023年8月3日・4日と8月8日から10日の2回にわけ、県内の2つの高校（名古屋高校と南山高校女子部）から高校生の受け入れを行いました。初めての試みのため、何をプログラムに入れるのか色々考えるところから始まりました。インターンシップとしては、医師と一緒にその仕事ぶりをみせるのが良いと思いますが、医療は多職種連携というのを知って欲しいと思い、プログラムを組んでみました。そして、最も入れたかったのは、それぞれの高校を卒業生した本学学生・研修医との懇談でした。

主なプログラムは以下の通りです。参加した高校生は楽しんでくれたようでした。

- ・ドクターヘリ見学・ICU見学
- ・内科外来にて診療見学
- ・カテーテル検査室見学：検査後にカテーテルを触りました
- ・メディカルスタッフ部門見学（中央検査部・放射線部・薬剤部）
- ・シミュレーションセンター：採血・縫合・エコーなど実施
- ・OB・OGとの懇談



今回は、急な企画だったにもかかわらず、救命科の関係の皆様、メディカルスタッフ部門の技師長、それぞれの高校のOB・OGの皆様にご協力頂き、感謝します。特に、OB・OGは、忙しい中、時間を作ってくれて、院内を案内してくれたり、高校生活（受験勉強）の過ごし方を話してくれたり、こちらの予想以上に熱心に、そして快く手伝ってくれました（時間が足りないくらいでした）。何より非常に嬉しそうに後輩に接しているのが印象的でした。中には連絡先を交換して帰った参加者もあり、将来本学を受験・入学に繋がってくれればと思いました。

今回、参加した高校生によると、それぞれの高校では本学でのインターンシップ希望者が大勢おり、志望理由などを提出した上で、選抜されたとのことでした。次回はもう少し受け入れの枠を広げることができるか、検討です。

医学教育センター長 早稲田勝久

◆医学教育者のためのワークショップ



今年度の医学教育者のためのワークショップ（学内ワークショップ）は、2023年12月1日（金）・2日（土）に開催されました。新型コロナウイルス感染の影響により、ここ数年はWeb開催でしたが、今年度は久しぶりに対面での開催となりました。テーマは「人間形成と創造性の啓発を図る一貫性のある教育をめざして」とし、新たに赴任・昇任した教員を中心に幅広く参加者を募り、21名の先生方に参加いただきました。笠井医学部長、鈴木教務部長、医学教育センター長の挨拶後、研修開始となりました。

本ワークショップの目的は、本学の医学教育の目標を再認識し、建学の精神をもとに、どのような医学教育がこのコロナ禍に必要とされているのかを議論することです。1日目は、「現在の愛知医科大学の教育の課題」につ

いてまず議論を行いました。次に、コンピテンス・コンピテンシーの学生による自己評価結果を共有し、到達度の低い項目について議論しました。これは、コンピテンス・コンピテンシーの今後の見直し作業に繋がるものとなりました。プロフェッショナルリズム教育（宮田先生）や学修支援の現状（河合先生）について、情報共有を行いました。

2日目は、AIDLE-Kの使い方（橋本先生）、シミュレーションセンターの活用（船木先生）、最近の学生像（宮本先生）について情報共有をしました。他に、「ジョイントセッションの構築（神谷先生）」「上手い教育のための7つのポイント（伴先生）」についてグループで議論を行いました。

また本年度は、2人の外部講師にも協力を頂きました。高村昭輝先生（富山大学医学教育学）には、「difficult teaching encounter」として、指導困難・学習困難な場面での対処するかを議論しました。また、杉浦真由美先生（北海道大学大学院教育推進機構）には、「インストラクショナルデザイン」として、授業の設計について議論をしました。いずれのセッションでも多くの質疑応答があり、充実した内容となりました。

振り返りでは、基礎医学と臨床医学の枠を越えて意見交換ができ、他科の先生の意見や考え方を知ることができて有意義であったとの感想が多くありました。参加者の皆様のご協力もあり、無事にワークショップを終了することができました。ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

医学教育センター長 早稲田勝久



◆医師国家試験CBTトライアル試験

2023年12月22日に医師国家試験CBT（computer based testing）トライアル試験が昨年度に引き続き実施されました。現在、医師国家試験のCBT化について検討が進められており、厚生労働科学研究「医師国家試験CBT化に向けた研究」に本学も協力する形で、トライアル試験が実施されました。本研究には、伴特命教育教授が研究分担者として、私が研究協力者として参画しており、本学はトライアル初年度より参加しています。

医師国家試験をCBT化する目的としては、1. 動画・音源を使用した問題が出題出来る（より臨床に近い問題が出題可能）、2. 問題の順送り機能を活用し、臨床推論の問題が出題出来るなど、臨床を意識した作問が可能となることです。また、1. 問題を非公開として、良問をプール化する（毎年新規問題を作成するのは大変）、2. 問題をプール化することにより、新規問題作成が難しい場合でも対応可能となる（新型コロナウイルス感染症による移動制限で問題作成が難しくても対応できる）、3. 同レベルの問題セットを複数準備することにより、複数日で試験を実施出来るなど、運用面での利点もあります。

今回のトライアル試験には、5学年次生の希望者56名が受験しました。受験後の学生アンケートでは、「より臨床に則した講義が必要」「シミュレーター等を使用した心肺の聴診の練習が必要」「診察の手技や所見について、詳細なフィードバックが必要」「多くの疾患の症状を見れるようにしてほしい」といった意見がありました。

今後、より実践に則した実臨床に近い形式の問題が多く出題されることが予想され、臨床実習の重要性が益々高まってきます。今後の国家試験の動向にも注目しながら、本学のカリキュラム改革・授業内容の改善に繋げ、来るべき国家試験のCBT化に備えていきたいと思います。

医学教育センター長 早稲田勝久

◆医学教育学会に参加して

第55回医学教育学会が長崎（出島メッセ長崎、7月28日、29日）にて、開催されました。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行されて初めての開催となりました。長崎での開催であることから、特別講演では、「シーボルト来崎200周年記念講演：シーボルトの鳴滝塾と医学教育」や「長崎の感染症教育の変遷～江戸末期のポンペの頃からCovid-19 パンデミックまで～」の企画があり、日本での西洋医学発祥の歴史に触れることができました。

教育センター関連では、「医療プログラムの変化による卒業時習得すべき臨床能力への影響」（早稲田先生）、「医学生の学修支援体制のあり方と短期的成績改善効果の検討」（河合先生）、「日本へのOSCE の導入とその全国レベルの展開の歴史」（伴先生）、「コロナ禍での医学部学生の生活習慣および活動量の変化」（IR室佐藤）が発表を行いました。また、数学の橋本先生から「医学部医学科における初年次アカデミック・スキル科目の実態調査」についての発表がありました。

学生セッションでは、5年生の富田明日香さん、中村天音さんから本学の選択講座（英語 山森先生）での成果をまとめた発表（「学生講師による選択講座「実践例から学ぶ医学部初年次学習法」：意識改革から実践へ繋げる2年目の取り組み」）があり、Student Award（優秀発表賞）を受賞しました（詳細は富田さん・中村さんの原稿をご覧ください）。富田さんと中村さんは、昨年度も「医学部留年に繋がる学習関連情報の欠如：学生目線による機序解明と陥りやすい1年生に対する予防的な支援」について口頭発表しており、継続した研究成果が受賞につながったものだと思います。

ワークショップが数多く企画されるのも医学教育学会の特徴の一つです。ワークショップでは「セルフケア教育を体験してみよう」（座長 宮田先生）でのマインドフルネスの体験や「医療系学部におけるAI教育（Pythonで実践：医療とAI・ビッグデータ入門）」での演習、「厚労科研事業：ICT を活用した臨床教材を作成しよう」（座長 早稲田先生）、「学習者の自発的な学びを促すコツ～ナッジ理論を学ぼう～」など数多くのワークショップがあり、ディスカッションや演習を通した学びを体験できる企画が多くありました。

来年度の医学教育学会は、東京（帝京大学、2024年8月10日、11日）にて開催予定です。医学教育学会にご興味のある方は、ぜひお声がけください。

医学部IR室 講師 佐藤麻紀

◆医学教育学会に参加して

第55回日本医学教育学会大会 in 長崎



2023年7月28～29日に出島メッセ長崎にて開催された第55回日本医学教育学会大会にて、次のような内容で口頭発表させていただき、Student Award（優秀発表賞）を受賞いたしました。

【タイトル】学生講師による選択講座「実践例から学ぶ医学部初年次学習法」：意識改革から実践へ繋げる2年目の取り組み

【背景と目的】コロナ禍における医学生の成績不振は、医学部の過密カリキュラムをこなす学習法や時間管理術等が、同級生や先輩から伝わらなかったことが要因の1つとして考えられた。その対策として2021年度の選

択講座では、3年生が、級友とのコミュニケーションの重要性と勉強法を伝えた。しかし、受講生の中には、行動への移し方が分からず結果を出せなかったという声が散見した。そこで2022年度は、より具体的な実践法を上級生が1年生に例示し、行動に繋げることを目指した。

【方法】2022年度では前年度の受講生らが講師となり1年生37名に向けて70分間3回の講義を行った。コツコツ型学習法の第1週では、解剖学の学習手順と小テストの重要性を力説し、生理学の教材の活用法と情報選別のための能動的な受講姿勢について語った。短期集中学習法の第2週では、生化学について図式化して理解するコツを述べ、生物学攻略法と級友との進捗状況の確認と最後までやり抜く気合いについて熱弁した。第3週では、行動変容を促す

仕掛けとして講義情報を少人数で「要点整理する・教える・発信する」学習を体験させた。1年生を9班に分けて第1・2週で先輩から学んだ極意を、受講生以外の同級生に伝える手書き壁新聞の作成をさせ、完成版を講義室背面に2月まで掲示した。効果測定のために講義中（9～10月）と試験全日程終了後（2月）に学習に対する意識と実践の調査をMoodleを用いて行った。

【結果と考察】調査結果を見ると、意識の点で「学習項目の重要度の見極め、試験に関する情報整理、アウトプットによる理解と記憶の定着、級友との学習

に関する情報交換や進捗状況の確認、試験勉強における辛さの共有」等の重要性を実感したと答えた。行動面においても「級友との進捗状況の確認、他教科と関連づける学習法、アウトプット学習法、最重要事項の徹底した理解」等を実践して効果的だったとの回答が多かった。今回の講座内容で補強した「学生講師による具体的な実践方法の例示」と「壁新聞づくり」が功を奏し、意識改革のみならず実践にも結びつき、1年生受講生の好成績に繋がったのではないだろうか。

本研究の基盤となった選択講座では、当時2年生の猪口貴志さん、梶浦大輝さん、線崎奏夢さん、新美友太郎さんが講師役として活躍しました。そして、研究を進める上で、大橋渉先生、早稻田勝久先生、河合聖子先生、福沢嘉孝先生、山森孝彦先生から、統計解析の仕方、タイトルと抄録の書き方など多くのことを教えていただきました。さらに、ご指導を受けながら、富田と中村で相談を重ね、スライドの魅せ方に至るまで完成度を高めた研究発表を目指しました。学会発表当日は緊張しましたが、自身の研究を発表する楽しさや聴いてもらえる嬉しさ、質疑応答でのディスカッションの面白さを経験することができました。

また、今回の学会大会にて優秀発表賞を受賞したことで、大学からも学生表彰をいただくことができました。このような貴重な機会をいただけたことに感謝申し上げます。今後も励んでまいりますので、ご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

医学部5年生 富田明日香・中村天音

◆スタンフォード大学病院Visiting Observer Programを終えて

5年生の夏休みの間に1週間程スタンフォード大学病院に見学に行く機会を頂きました。スタンフォード大学はアメリカのカリフォルニア州にあり、サンノゼ空港から車で20分程の所にあります。今回見学に行くきっかけとなったのは、愛知医科大学卒の安藤先生が早稲田先生を通して学生に呼びかけて下さったことでした。5年生の学生もう1人と一緒に訪れました。

安藤先生はスタンフォード大学病院で麻酔科の先生として活躍されているため、今回は麻酔科のobserverとして見学プログラムに参加しました。スタンフォード大学には日本人の先生が数名いらっしゃって、初日から多くの先生方にお世話になりました。プログラム内容としては、麻酔導入、外来、回診、研究室の見学等をさせて頂きました。空いている時間は病院・大学周囲を散策したり、先生方とバスケットボールをしたりして、楽しい時間を過ごさせて頂きました。

見学中経験した症例で非常に印象に残ったものが一つありました。印象に残った理由としては、まず日本では滅多に無いタイプの移植の症例であったことでした。二つ目の理由は、実際この手術に入らせて頂き、縫合もさせて頂いたことでした。違う国の初めて訪れる病院で実際参加させて頂いて、普段のクリクラとは違う緊張を感じました。三つ目の理由は、手術が夜遅くに始まったのと、少し離れた病院で行われた手術だったので、終えて宿舎に戻ってきたのが夜中の2時を過ぎていたことでした。これが見学の初日で、2人とも大分衝撃を受けました。



スタンフォード病院周辺はとても治安が良く、女子2人で行きましたが安心して過ごすことができました。宿舎は病院から車で15分程離れた所のairbnbを借りて、移動は主にuberでした。Airbnbにはキッチンがあったので、2人で料理をした日もありましたし、外食した日もありました。しっかり調べて宿舎を選んだので、生活面で困ったことは特に無かったです。病院に行かなかった日や見学が終わった後は遊びに行きました。私たちはサンフランシスコとユニバーサルスタジオに行きました。近くにショッピングモールもあったので空き時間はショッピングをしたり、美味しいご飯を食べに行ったりしました。観光も兼ねて行けたのでとても楽しかったです。

先生方には手厚く指導して頂き、日本とは異なる臨床現場を見ることができて非常に良い経験になりました。学生のうちにこのような貴重な経験をさせて頂いたことを心から有り難く思います。今回の見学を可能にして下さった皆様、また現地でお世話になった皆様に心から感謝を申し上げます。今後本学からもっと多くの学生がこのようなプログラムを経験できることを願っています。

医学部5年生 高柳志津子

◆多職種連携演習（脱出ゲーム）について

本学医学部では、各学年（1～4年生）の既習済み知識・体験を踏まえ、「医師として求められる基本的な資質・能力（プロフェッショナリズム、コミュニケーション能力、チーム医療の実践、医療の質と安全管理など）」の観点から段階的多職種連携演習を行っています。本学看護学部生の他、他大学の薬学部、2023年度からトライアルとして栄養学部の学生も数名演習に参加しています。これにより、医学・看護学・薬学・栄養学の視点から共同演習を進めることができ、他職種の専門的知識や視点を踏まえた患者（家族）を中心とした医療チームについて考えることができます。



今回、2023年12月7日に行われた2年生の多職種連携演習についてご紹介します。昨年に引き続き、非常勤講師として、医学教育学会等で「脱出ゲーム」に関連したワークショップを開催している、浅田義和先生（自治医科大学）、村岡千種先生（藤田医科大学）にご協力いただきました。

「脱出ゲーム」では、全学生230人を40Gに分け（5～6人／G：各グループに医学部・看護学部生が入る）、ミッション達成につながる6つのヒントが記載されている各封筒をグループに配布します。各メンバーが持っている封筒内の情報をメンバーと共有し、自分の考えを述べていくことが重要になってきます。学生はミッション達成にむけ、ゲーム感覚で楽しみながら演習に臨むことができていました。学生がテーブルに前のめりになりながら、メンバーと協力して脱出ゲームに取り組んでいる姿が印象的でした。

今回の演習を通して、ゲームの要素を取り入れることで学生の学びに対するモチベーションが高まると実感しました。また、浅田先生、村岡先生による、ゲーム場面にいるような没入感の示し方（今回は、生物兵器ウィルス製造をしている研究所）、説明方法など、科目担当者として多くの気づきを得ることができました。

この場をお借りし、浅田先生、村岡先生に心より感謝いたします。

シミュレーションセンター 講師 船木 淳